

3. 人生の節目

タオルの知識も経験もない状態で、小さなタオル工場を継承

怒涛の大学生生活を終え、帰郷した白石裕二氏は、「人に雇われるよりは自分で何かしたい」という漠然とした思いがあり、越智郡朝倉村（現在は今治市）にあった個人事業の越智タオル工場を継承することになった。この工場は、父親の一番下の妹の安子氏の夫・越智五郎氏が1973年に設立した小さなタオル工場である。1978年4月、一家の大黒柱であった五郎氏が急逝し幼い子供を抱えて路頭に迷いかけた叔母の安子氏のために、白石氏が五郎氏の代わりに実質の経営者となり（代表は安子氏）、タオル工場を引き継いだというわけである。

表1は1954年から1995年までの今治タオルの企業数の推移であり、それをグラフにしたものが図1である。越智タオル工場が設立された1973年は、表1と図1で見ると、前年の1972年の328社から急増し、法人と個人事業を合わせて501社を数え、今治タオルの歴史において上位を争うほど企業数の多かった時期である。白石氏が同工場を引き継いだ1978年においても488社のタオル工場があり、この頃は自動織機が主流であるが、生産量を年々伸ばしていった。

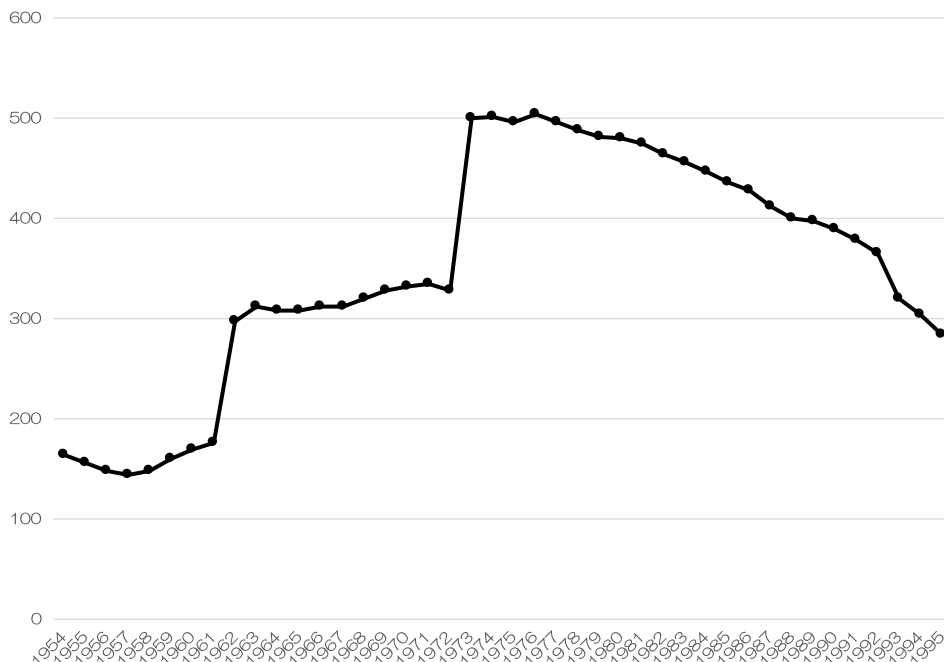
越智タオル工場は、ドビー機4台、ジャカード機4台の計8台の村秀式自動織機と豊田織機を備えており、おもにバスタオルやタオルケットなど大判の白地タオルを生産していた。設立間もない頃は、白石氏の父親の初夫氏が勤めていた中忠（株）から原料となる綿糸を譲り受けて賃織りしていたが、白石氏が継承して10年ほど経った頃から自社で綿糸の購入をおこなうようになり、独立したタオル工場となった。当時のおもな取引先は、賃織り時代から付き合いのある中忠、一広（株）、在間産業（株）（2003年廃業）、三宝産業（株）（1990年ミタカラ（株）に改称し1996年廃業）などで

あり、その下請けとしてタオル製品を生産した。

表 1 1954年から1995年における今治タオルの企業数（社）

年	企業数	年	企業数
1954	165	1975	497
1955	157	1976	504
1956	149	1977	497
1957	145	1978	488
1958	149	1979	482
1959	161	1980	481
1960	170	1981	475
1961	177	1982	464
1962	298	1983	457
1963	313	1984	447
1964	309	1985	437
1965	309	1986	428
1966	312	1987	413
1967	313	1988	401
1968	321	1989	398
1969	329	1990	390
1970	333	1991	379
1971	335	1992	366
1972	328	1993	321
1973	501	1994	305
1974	502	1995	284


図 1 1954年から1995年における今治タオルの企業数（社）



出典：今治タオル工業組合「企業数、織機台数、革新織機台数、従業員数、綿糸引渡数量、生産量、輸出・輸入数量の推移」より作成。

勉強はよくできたが社会人経験のない白石氏が、父親の薦めとはいえ、タオルとは一切関わりのない人生を今まで送ってきたため、いざタオル工場を引き継いだものの、白石氏自身が路頭に迷うのではないかという状態にあった。機織り、管巻きを担当する女性従業員3名、そして帳簿付けや綿糸調達などカネに関する業務を買って出てくれた相談役の父親がただで、経営についても技術についても教えてくれる先輩はおらず、予想とは違う職場環境に最初は戸惑うばかりであった。「織機はボタン一つ押したら動くんやろとおもってたけど、どんでもない話やった。ちゃんと機械の調整はせないかんし、消耗品は替えないかんし、経糸は繋がんといかんし、思うように動いてくれんのよ」と、白石氏は当時のことを振り返る。夜も眠れず悩む毎日、白石氏の社会人としてのスタートは波乱万丈だった。しかし、持ち前の集中力と知恵や工夫で暗中模索しながらも少しずつ難局を乗り切っていた。

タオル工場には8台の自動織機が備え付けられていたので、1台の織機が壊れても他の正常なものと見比べながら注意深く観察して修理し、そのうちに自分でも織機の改良ができるほどになった。織機の専門家である機料屋に頼めばすぐに解決できた話であるが、当時の時給で1,000円から3,000円ほどのコストがかかったため、なるべく人に頼らず自力でタオル製織に係わる技術を機械と毎日向き合うなかで頭や体に叩き込んだ。ただ、どうしてもわからないときは、機料屋に電話して教えてもらったこともある。

小規模なタオル工場の経営者となった白石氏の仕事は、タオルづくりの他にも配達、営業、集金などさまざまな細かい業務におよんだ。現在では想像もつかないが、白石氏の言葉を借りると「もともと社交性がないから苦手だった」にもかかわらず、タオル業界とのネットワークづくりにも勤しみ、「無尽  に出ても一人でじっと座っている感じやったけど」、引き継いだタオル工場の発展に必要なことはなんでもやった。手探りで試行錯誤の連続は越智タオル工場


の廃業までつづくが、これらの経験がのちに指導する立場になって十分に生かされた。



結婚式の様子



妻・園子氏と子どもたち

越智タオル工場を必死に守って6年の月日が流れた1984年、白石氏が30歳のときに親同士の関係から縁あって見合いをし、1985年正月に園子氏と結婚した。園子氏の父親が村上産業（株）の今治支店長で、白石氏の父親と仕事上の取引があって双方顔見知りであったことに加え、叔母の安子氏が若い頃に同社今治支店に勤めており園子氏の母親と同じ職場で仕事仲間だったこともあって、トントン拍子で見合いの話がまとまった。白石氏が30歳、園子氏が24歳の6つ違いであり、白石氏は運命のようなものをそのとき感じていた。「うちの父親と母親も6つ違いで、うちの兄貴と奥さんも6つ違い。これも何かの運命かな。」

運命的な出会いから間もなく、1985年に長女、1987年に長男、1989年に次男を授かった。園子氏は社交的で料理上手で働き者で、タオル工場の経営者と学校の講師を掛け持ちし孤軍奮闘する白石氏を懸命に支えた。

4. 第二の人生の節目

古くからタオルづくりを担う人材を育成してきた地元の訓練校に講師として着任

白石氏は、1989年から父親と入れ替わるように、整経に係わる講師として愛媛県立今治高等職業訓練校（現在の愛媛県立愛媛中央産業技術専門校）で教えるようになった。半ば父親の推薦によるものであったが、「教えること」が性に合っていた。

まずは戦後から現在に至るまで、今治タオル業界の人材育成で重要な役割を果たしてきた訓練校の歴史を表2とともに振り返ってみよう。

訓練校は1950年4月に今治公共職業補導所として設立されたが、その前身は愛媛県染織試験場（現・愛媛県産業技術研究所繊維産業技術センター）によって1946年4月に創設された繊維工業講習所（1年課程）である。1950年4月に職業安定法のもとで公共職業補導所に管轄が移され、今治公共職業補導所に改称された。1950年4月の入所生に、『タオルびと』でとり上げた尾崎今男氏がいる（『タオルびと』2013年1月号を参照）。補導所は、その後の法律の施行・改正にともなって何度か名称を変え、1958年愛媛県今治繊維職業訓練所、1962年愛媛県今治職業訓練所、1969年愛媛県立今治専修職業訓練校となった。そして1977年に愛媛県立今治高等職業訓練校となり、校内に織機調整科と高等訓練課程が設置され、2年後の1979年にはタオル業界の要請をうけ整経科が新たに設けられた（辻悟一〔1982〕『えひめのタオル八十五年史』四国タオル工業組合、192頁）。ちょうどこの頃に白石氏の父親の初夫氏が整経科の教員に着任した。

白石氏が父親と交代で整経科の教員となったのが1989年、その後1993年に愛媛県立今治高等技術専門校に改称され、さらに2019年に愛媛県立愛媛中央産業技術専門校となり現在に至ってい

表2 愛媛県立今治高等技術専門学校(現・愛媛県立愛媛中央産業技術専門学校)沿革

年	月	内容
1950	4	今治公共職業補導所が設立され、木工科と織布科を設置
1952	4	縫製科を設置
1958	7	職業訓練法施行にともない、愛媛県繊維職業訓練所と改称
1962	4	愛媛県今治職業訓練所と改称
1963	4	木工科を宇和島職業訓練所に移転
1965	4	織布科を染色科と織布科に分離
1968	6	実習場4棟、寄宿舎1棟を新築し、現在の場所(今治市桜井団地4-1-1)に移転
	3	本館を新築
1969	4	配管科を新設
	10	職業訓練法改正にともない、愛媛県立今治専修職業訓練校と改称
1977	4	愛媛県立今治高等職業訓練校と改称 織機調整科、織機調整Ⅰ科(専修課程)、織機調整Ⅱ科(高等訓練課程)に改編
1978	8	本館増築、織機調整Ⅱ科新設にともない実習場1棟新築
1979	4	タオル業界の要請を受け整経科を設置
1980	4	縫製科(1年課程)を縫製科6ヶ月過程に変更
1984	4	タオルデザイン科と織機調整(整経)科を新設(ともに能力再開発訓練)
1985	10	職業訓練法が昭和60年の改正によって職業能力開発促進法となる
1986	4	タオルデザイン科をグラフィックデザイン科(能力再開発訓練)と改称
1987	4	配管科を建築設備科(能力再開発訓練)と配管科(養成訓練)に分離 OAビジネス科(能力再開発訓練)を新設
1989	4	織機調整Ⅰ科を織機調整科、織機調整Ⅱ科を織物管理科と改称
1991	3	第2教棟を新築
		愛媛県立今治高等技術専門学校と改称
1993	4	能力再開発訓練・養成訓練から普通職業訓練の普通課程(高卒等若年者を対象)と短期課程(再就職を目指す離職者を対象)に改正し、これによって①普通課程:織物管理科(20名)、グラフィックデザイン科(10名)、OAビジネス科(20名)、②短期課程:織機調整科(10名)、染色科(20名)、縫製科(60名)、整経科(20名)となる 建築設備科を配管科に統合
1994	4	グラフィックデザイン科を工業デザイン科に改称
1998	4	アパレル技術科を新設(普通課程)
2003	4	OAビジネス科をOA経理科(短期課程)に変更
2005	4	アパレル技術科と縫製科を服飾ソーイング科(普通課程)に再編
2006	4	織物管理科(普通課程)、織機調整科(短期課程)、染色科(短期課程)、整経科(短期課程)の4科を織物エンジニア科(普通課程20名・12ヶ月)と染色エンジニア科(普通課程20名・12ヶ月)の2科に再編 タオル技術科を新設 OA経理科を廃止 障害者に応じた委託訓練事業開始
2007	4	設備エンジニア科(普通課程)を新設
	9	タオル技術科を廃止
2008	4	織物エンジニア科、染織エンジニア科を繊維エンジニア科(普通課程30名・12ヶ月)に再編 実用併用型訓練モデルコースを全国で初めて実施 介護福祉士コースを開設
2009	4	タオル製造技能初級コースを開設 有期実習型訓練(6ヶ月コース)を開設
2010	4	婦人子供服製造コース(実践型人材育成システム)を開設 有期実習型訓練(婦人子供服製造コース)を開設
2011	4	ものづくり技能体験コース(高校生受入)を開設
2012	4	繊維エンジニア科を廃止し、今治タオルものづくり科(普通課程20名・24ヶ月)を新設
2013	4	服飾ソーイング科を廃止し、服飾モード科(普通課程10名・24ヶ月)を新設
2019	4	松山高等技術専門学校と統合し、愛媛県立愛媛中央産業技術専門学校と改称

出典: 愛媛県立愛媛中央産業技術専門学校「施設内訓練コースの概要(令和元年7月作成)」3頁(愛媛県立産業技術専門学校提供資料)。辻悟一『えひめのタオル八十五年史』四国タオル工業組合、1982年。

る。法制度改正などによる組織名称の変更と同時に、学科やカリキュラムも改編されているのが表からも窺えるが、基本的には今治の伝統的地域産業である綿織物業の発展を支える人材育成の役割を担っており、同校の歴史からタオル業界の盛衰の歴史をも見てとることができる。とりわけ、バブル経済の崩壊や経済のグローバル化によって1990年以降のタオル業界は少しずつ斜陽化していくが、その影響は専門校の運営にもおよび、度重なる学科やカリキュラムの内容変更はその表れである。



2019年度パンフレット（左）と愛媛県立中央産業技術専門校の正面玄関（右）

表3で示すように、現在、専門校は、施設内訓練として若年者向けの普通課程の「今治タオルものづくり科」(定員10名・24ヶ月)、「服飾モード科」(定員10名・24ヶ月)、「ビジネスデザイン科」(定員15名・12ヶ月)、「設備エンジニア科」(定員10名・24ヶ月)の4科が設置されている。

加えて、短期課程で企業在職者を対象としたスキルアップコースがあり、「実践型人材養成タオル製造技能(初級)コース」(定員10名・12ヶ月)、「有期実習型訓練タオル製造技能(短期)コース」(定員5名・6ヶ月)を設置しており、その他企業からの要望による各種講習(随時・12時間以上)をおこなっている。また、上記の訓練科とコースに加え、障がい者や離職者などの委託訓練も実施して

いる。

普通課程においてタオルに関連する科は、今治タオルものづくり科、服飾モード科、ビジネスデザイン科の3科である。専門校の「入校ガイド」を参照すると、今治タオルものづくり科で目指せる職種は、「織布工、保全工、織物分解設計士、整経士、染色工、色彩管理

表3 普通科コースの内容

科	今治タオルものづくり科	服飾モード科	ビジネスデザイン科	設備エンジニア科
期間	2年	2年	1年	2年
定員	各学年10名	各学年10名	15名	各学年10名
対象者	高卒者他（若年者）	高卒者他（若年者）	高卒者他（若年者）	高卒者他（若年者）
自己負担額	50,000円	39,000円	34,000円	65,000円
おもな学科	織物概論、染色概論、デザイン工学、電気・溶接概論、情報工学概論、製織・分解設計法、整経法、染色法、テキスタイルデザイン、縫製加工法	服飾概論、デザイン概論、商品企画、製図、服飾デザイン、縫製知識、アパレルCAD	コンピュータ概論、生産工学論、マーケティング論、デザイン、人間工学、製品デザイン、工業デザイン、工作法	電気工学概論、機械工学概論、自動制御概論、製図、機械加工法、送配電および配線設計、給排水設備、高圧ガス
おもな実習・実技内容	機械操作基本実習、織物基本実習、染色基本実習、繊維製品試験、電気・溶接工作実習、捺染実習、整経実習、テキスタイルデザイン実習、電子機器操作実習、仕上加工実習	機械操作基本実習、商品企画基本実習、デザイン基本実習、縫製基本実習、服飾製図実習、仕上実習、CAD実習	器工具使用法、デザイン基本実習、色彩構成基本実習、平面および立体構成、製図、製品計画実習、試作表現実習、工業デザイン実習、アートデザイン等	溶接基本実習、配管基礎実習、測定基本実習、熱切断基本実習、電線取扱実習、試験検査実習、電気機器実習
取得可能な資格	ガス溶接技能講習修了証、タオルソムリエ、3級表計算技士・ワープロ技士	2級技能検定試験受験資格、2級技能検定（学科試験免除）、3級表計算技士・ワープロ技士	Illustratorクリエイター能力認定試験、Photoshopクリエイター能力認定試験、Webクリエイター能力認定試験、3級表計算技士・ワープロ技士	2級技能検定試験受験資格、2級技能検定（学科試験免除）、アーク溶接特別教育修了証、ガス溶接技能講習修了証、液化石油ガス設備士、自由研削砥石特別教育修了証、第一・二種電気工事士、溶接技能者資格、3級表計算技士・ワープロ技士
目指せる職種	織布工、保全工、織物分解設計士、整経工、染色工、色彩管理者、ミシン仕上げ技能工、テキスタイルデザイン、タオルソムリエ等	CADオペレーター、パタンナー、商品企画員、アパレル系販売員、縫製デザイナー、裁断工、ミシンオペレーター、生産オペレーター	グラフィックデザイナー、DTPオペレーター、タオルデザイナー、タオル企画営業員、WEBデザイン補助、ネットショップ運営サポート	造船工・溶接工・電気工事士、配管工、機械加工員、液化石油ガス設備士

出典：愛媛県立産業技術専門学校ホームページ「愛媛中央産業技術専門学校のご案内」より作成。

者、ミシン仕上げ技能工、テキスタイルデザイン、タオルソムリエ」などであり、地元のタオル製造に携わるタオルメーカーや染色加工業の企業に就職している（「愛媛県産業技術専門学校入校ガイド」2019年度版、5-6頁）。服飾モード科で目指せる職種は、CADオペレーター、パタンナー、商品企画員、アパレル系販売員、縫製デザイナー、裁断工、ミシンオペレーター、生産オペレーターなどで

あり、地元のタオル関連企業を中心に人材を輩出している。ビジネスデザイン科で目指せる職種は、「グラフィックデザイナー、DTPオペレーター、タオルデザイナー、タオル企画営業員、WEBデザイン補助、ネットショップ運営サポート」であり、就職先はおもに地元のタオルメーカーや染色加工業者、捺染加工業者といったタオル関連企業であるが、その他にも観光業や印刷業など他業種にも就職の実績がある。

科	修了者数（名）	就職者数（名）
今治タオルものづくり科	27	38
ビジネスデザイン科	141	142
服飾モード科	22	24
繊維エンジニア科	48	46
織物エンジニア科	21	19
染織エンジニア科	23	22
織物管理科	175	159
工業デザイン科	224	197
服飾ソーイング科	130	112
アパレル技術科	56	39
織機調整科	902	886
染色科	625	524
縫製科	1,901	1,584
整経科	280	264
織機運転科	9	9
タオル刺しゅう科	2	2
製織科	2	2
デザイン科	71	61
合計	4,659	4,130
その他在職者訓練	2,817	-

注：同表は、1950年度～2018年度におけるタオル製造に係わる訓練生修了者数・就職者数をまとめたもの。

出典：愛媛県立愛媛中央産業技術専門学校「施設内訓練コースの概要（令和元年7月作成）」、4頁（愛媛県立産業技術専門学校提供資料）。

表4は、専門学校でタオル製造に係わる技術を修得した修了者数および就職者数の延数である。1950年の設立から現在まで4,659名の修了生を輩出し、4,130名の社会で活躍する人材を育ててきた。専門校の約70年の歴史における成果である。（次号につづく）

